

## IPS に参加して

この度、2014年8月11日～17日まで、ベトナム、ハノイで開催された国際霊長類学会に参加した。

私にとって、このIPSへの参加は、初めてでもあり、2回目でもある。というのは、2010年、京都でこのIPSが開催されたときに足を運んでいた。学部1回生、ワークショップのようなものに参加した覚えがある。あるテーマにそって研究者たちが、机なしで、円の形に並べられた椅子に腰かけ、お菓子を食べながら英語でディスカッションをした。私は、英語に全くついていけず、日本語で議事録をつけていた方の後ろに座り、その議事録を見ながら、なんとなく話が分かったような気だった。そういった意味で、参加したけれども、参加していないようなものである。

少し話が変わるが、そのワークショップの際、議事録を読んで満足していた中、突然、学生も自己紹介することになった。私は、あまりにも突然のことで、また、多くの海外研究者を前に怖気づき、凍りついた。英語が全く出てこず、たどたどしい英語を話した覚えがある。「もっと英語を勉強しないと」と強く感じ、私の学部時代の英語の勉強を支えた出来事となった。

それから4年経ち、参加したのが今回のベトナムでのIPSである。実際に参加して感じたことを、自らのポスター発表に関して、そして、口頭発表に関して、それぞれ述べたい。

ポスター発表に関して、今回、私は自らの卒業論文のポスターを発表した。成果としては、20枚ほど刷ったハンドアウトがなくなっていた。加えて、2時間の在席時間で、12名の方がポスターを聞きに来てくださった（半数が、知り合いではなかった海外研究者）。参考になるアドバイスをいただいたり、逆に、来てくださった方の対象で母子間の食物分配はどうか聞いたり、楽しくやりとりを交わすことが出来た。

自分の発表を振り返ると、時折、ポスターの字面を見ながらの発表であった。相手の反応に合わせて発表するには、相手をずっと見ながらでも発表できるようにしなければならない。そのためにも、何度も何度も暗唱して、勝手に口から出てくるくらいにして、今後は発表に臨まないといけないと思った。また、説明が冗長になってしまっているような気がした。今までの説明の方法にこだわらず、様々な説明方法を模索して、もっと簡潔に、伝えたいことを伝えられるような発表ができるようにしたい。

口頭発表に関しては、3つの観点から考える事があった。

ひとつが、研究内容である。今の研究内容よりも、より新しく、より厳密なものを自分はおこなわなければならないような気がした。ジェスチャーのように、トピックが昔から変わらず、その域を出ないようなものに関しては、新たな切り口が必要である。また、短

絡的に行動分析から、その行動の意味を研究者が結論付けてしまう傾向がある気がした。例えば、母子間の身体接触を測定し、それを「愛着」と結論付ける研究があった。しかし、身体接触→愛着間の、因果関係は調べられていない。その間の関係を実証的に示してこそ、その結論が言えるわけである。より実証的に、より厳密に行う必要を感じた。

ふたつめが、発表の仕方である。発表の仕方は、やはり海外の研究者はとてもうまい。英語に関して、日本人にはハンデがあるが、それ以上の違いがあるような気がした。例えば、「落着き」である。海外の研究者の落ち着いた話しぶりは、聴衆の理解を進め、納得させる。また、話すときの気持ちの入れ方に違いも感じた。日本人は、覚えてきた英語を話すのに精一杯であり、話す言葉に心が伴い切っていないような気がした。一方、海外の研究者には、言葉に気持ちに乗っていて、声の強弱、スピード等にそれが表れていた。スライドの量や、図の見せ方なども、海外の研究者の方が、簡潔で、とてもすっきりしていたように思う。海外の研究者の良いところをどんどん真似していきたい。日本人、海外の方という枠にとらわれず、全ての発表の中で、私が一番まねしたいと思ったのが、京都大学霊長類研究所所属の Lira さんの発表だ。英語がとても上手である。アクシデントがあったものの、それには動じず、むしろその後からは非常に落ち着いて発表をしていた。強調すべきポイントがきちんと聴衆に伝わっており、スライドも見やすかった。質疑応答に関して、的確な説明をしていた。何よりも、かなり努力した跡が見受けられたことが、素晴らしいと思った。一生懸命努力すれば、いつかはあのような発表をできるようになる、その目標ができた。私も、これからたくさん練習、努力をして、彼女のような発表をしたい。

みつめが、質疑応答である。いつも、松沢先生との自主ゼミで、質疑応答の練習をしてきた。それ以外の場でも、常に質問をするよう心掛けてきた。それなのに、今回の IPS で一度も口頭発表に対して挙手して質問をすることができなかった。原因としては、発表内容を十分に聞き取れた確信がなく、聞き取りが間違っていたのではないかという不安に駆られたこと、そして、海外の研究者の前で、怖気づいてしまったことが挙げられる。質問をする姿勢自体はついてきたように思うが、それをアウトプットしないことには意味がない。英語の聞き取り能力を向上させるとともに、自分自身も、「研究者」として、自信を持って発言していくようにしていかなければならない。

全体を通して、4年前の全く英語が聞き取れず、またほとんど英語を話せなかった昔に比べて、学術の場で英語を使うことにはかなり抵抗がなくなったと思う。それでも、まだまだ英語が流暢に出てこない、きちんと聞き取れないといった問題がある。日本でできることを怠らず行い、常に世界を意識して英語力をつけていきたい。

また、自分の研究を世界の研究者に発表してみて、研究の醍醐味を知ったような気がした。やはり、じぶんの研究を認知され、認められるとうれしいものである。自信もつく。これから修士論文の研究計画を考えていくところだが、自信を持てるような研究、他者にも影響を与えられるような研究を行いたいと思う機会にもなった。

今回は集中してたくさんの「発表」を聞いた。大きな学会であり、最先端をいく研究者

が集まっており、彼らの発表の仕方から得るものがたくさんあった。それらの発表を常に意識して、抽出した真似したい点を実際に使ってみて、研究室での発表からよりよくしていきたいと思う。

最後になったが、今回の学会参加に関しては、日本学術振興会 研究拠点形成事業 A. 先端拠点形成型「心の起源を探る比較認知科学研究の国際連携拠点形成」（コーディネーター：松沢哲郎）の助成を得た。このような貴重な経験を、この時期に与えてくださった松沢先生、林先生に感謝申し上げたい。